

「古典探究」教材としての『宇治拾遺物語』

見 玉 里 麻

キーワード：高校古典教育、教材、新学習指導要領、主体的・対話的で深い学び

はじめに

高等学校において2022年度より施行される「新学習指導要領」¹では、現行の「国語総合」(4単位 必履修)、「現代文A」(2単位)、「現代文B」(4単位)、「国語表現」(3単位)、「古典A」(2単位)、「古典B」(4単位)が、「現代の国語」(2単位 必履修)、「言語文化」(2単位 必履修)、「論理国語」(4単位)、「文学国語」(4単位)、「国語表現」(4単位)、「古典探究」(4単位)へと改編される。すなわち、現行の必履修である「国語総合」の内容が専門領域によって分化して、“実社会”に特化した「現代の国語」と“言葉と文化(言語文化)”に特化した「言語文化」として再編され、また、選択科目である現行の「現代文A」「現代文B」「古典A」が、“実社会”に特化した「論理国語」と“言語文化”に特化した「文学国語」として再構成される。現行の「古典B」はそのまま「古典探究」に相当すると見てよいだろう。(下図参照)

現行		→	2022年度～	
科目	標準単位数	→	科目	標準単位数
国語総合	4		現代の国語	2
			言語文化	2
現代文A	2		論理国語	4
現代文B	4		文学国語	4
国語表現	3		国語表現	4
古典A	2			
古典B	4		古典探究	4

しかし、「文学国語」は、「我が国の言語文化に対する理解を深める」こと、「我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」ことを目標としているが、一方で、「読むこと」の教材を選ぶ際の留意点として、「近代以降の文学的文章とすること（下線は引用者）」が掲げられている。したがって、現行の「古典A」で扱ってきた古典題材そのものを読むのではなく、古典題材を扱った近代の文章を読むことになるだろう。ただし、文章を読むだけでなく、作品について、「様々な資料を調べ、その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動」が求められるため、その時に古典の文章を資料の一つとして読むという形になると予想されるⁱⁱ。そうなると、現在「古典A」で扱っている題材は、ほとんど扱われないか、扱われても読解のための資料の一つという小さな扱いとなり、「古典」として作品を読む機会はほとんど失われてしまう。これはまた、別稿でいずれ論じる予定だが、「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」という「言語文化」科目の設置意図を考えると、「言語文化」の発展的内容を含む「古典A」で学んできた内容が、大幅に縮小される結果となるのは本末転倒である。

現在、大学進学者がそれほど多くない高等学校や、理系へ進学するクラスでは「古典A」を選択科目として履修しているが、2022年度以降は「論理国語」「文学国語」を選択することで、必修科目の「言語文化」以外で、古典を学ぶ機会が失われるといった事態にならないように、教材の吟味が必要である。大学進学者の多い高等学校における選択科目については、「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」のうちから「論理国語」「古典探究」の2科目を履修するのが一般的になると予想される。なぜなら、現在のセンター試験の「国語」は「国語総合」を出題範囲としているものの、実際には「国語総合」の学習だけでは古典で高得点を獲得することが難しく、「古典B」の履修が必須であり、来年度から実施される共通テストがセンター試験と同程度の難易度であるならば、やはり大学入試を目指す生徒は、「古典B」、すなわち「古典探究」の履修が必要となるからである。また、国公立大二次試験・私立大入試でも、現在の「古典B」を出題範囲としている大学が多いことから考えて、「古典探究」が出題範囲に加えられる可能性が高く、「古典探究」を履修しない高等学校は少ないと考えられる。

1 - (1) 古典教材としての『宇治拾遺物語』の位置づけ

『宇治拾遺物語』をはじめとする説話は、古文の入門教材として扱われている。説話が選ばれる理由として、杉山英昭は、①一つの完結した話からなっている ②登場する人物が少ない ③全体が比較的短い文章によって書かれている ④一文が短いという傾向にある ⑤内容が意外な展開をみせておもしろい ⑥内容が比較的理解しやすい ⑦修辞法や比喩法など深みのある表現技巧が少ない ⑧さまざまな文法現象が現れる ⑨基本的な語彙があらわれる の9点を挙げているⁱⁱⁱ。そして、小峯和明が、「他の作品（『今昔物語集』や『古事談』などの先行説話—引用者注）と共通する話でも、『宇治拾遺物語』独自の語

り口でたくみに物語を展開しており、その表現の卓抜さは群を抜いている。(中略)『宇治拾遺物語』は中世に編纂される多くの説話集の中でも、異色の説話集であり、その世界はこのような固有の語り口や表現に支えられているのである^{iv)}と述べるように、『宇治拾遺物語』の「たくみな物語展開」および「卓抜」した表現の面白さは、古典に興味を持たせるのに適している。実際、現行の「国語総合」古典編の教科書の多くが『宇治拾遺物語』の「兄のそら寝」(巻1-12「兄の搔餅するにそら寝したる事」^{v)})、「絵仏師良秀」(巻3-6「絵仏師良秀、家の焼くるを見て悦ぶ事」)、「検非違使忠明」(巻7-4「検非違使忠明の事」)のいずれかを扱っていることも、杉山・小峰が指摘する点をふまえている。また、現行の「古典B」においても、「袴垂、保昌にあふ事」(第一学習社)「袴垂と保昌」(教育出版)は巻2-10「袴垂、保昌に合ふ事」、「小野篁広才の事」(三省堂)は巻3-17「小野篁広才の事」、「伴大納言の事」(数研出版)は巻1-4「伴大納言の事」を冒頭教材として扱い、発展的教材の入門編という位置づけをしている。

しかし、すでに須藤敬の指摘^{vi)}や、辻陽史・大島薫の指摘^{vii)}にあるように、少なくとも「兄のそら寝」に関しては、定番教材としての絶対的な評価を得ているわけではない。また、「内容・表現の面白さ」によって興味を持ったとしても、それが、学習者の「主体的・対話的で深い学び」につながっているのかという点において、疑問が残る。もともと、古典学習はいまだに知識伝達型の一方向的な学習が主体となっていて、「教材、学習指導ともに、生徒のかかえもつ現実感覚や知的欲求にとどいていない^{viii)}」と竹村真治が指摘するように、「主体的」で「対話的」な「深い学び」をうながす指導がなされないまま、言語習得技術としての学習に終始している。「主体的・対話的で深い学び」に関しては、『学習指導要領』総則「第3款の1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善^{ix)}」で、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方(以下「見方・考え方」という。)が鍛えられていくことに留意し、生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ることと説明されているように、古典に表現されている視点や考え方(教科等の特質に応じた見方・考え方)をもとに、「内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること^{x)}」が求められている。

『宇治拾遺物語』が入門期題材として「興味を持たせる」ことに適切であるとしても、「主体的・対話的で深い学び」につながるよう、教材研究をすすめる必要がある。

1 - (2) 入試問題としての『宇治拾遺物語』の位置づけ

2019年(平成30年度)に行われた大学入試^{xi)}では、下記のように『宇治拾遺物語』所

取の説話が出題されている。

- 静岡大学 巻3-6 「絵仏師良秀、家の焼くるを見て悦ぶ事」
- 宮城教育大学 巻6-5 「観音蛇に化す事」
- 岡山大学 巻8-1 「大膳大夫以長、前駆の間の事」
- 関西学院大学 巻10-10 「海賊発心出家の事」
- 駒澤大学 巻14-3 「経頼、蛇にあふ事」
- 宇都宮大学 巻14-7 「北面の女雑仕六が事」
- 松山大学 巻14-9 「大将つつしみの事」

『源氏物語』や『大鏡』といった人間関係の複雑な作品に比べると出題校数は多くはないが、例年、10校前後で出題されている定番作品である。文法知識を問う設問のほかに、話の展開をふまえた上で登場人物の行動理由や心情を説明する設問がある。また、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の本文比較を通して、読みを深める出題もあり、「古典探究」における「同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述」という目標を先取りしている。今後、このような出題の仕方は多くなると予想され、高等学校の指導においては、『宇治拾遺物語』と題材を同じくする説話・漢文との比較、前後の説話との関連性から「深く学ぶ」必要性が出て来るだろう。

2- (1) 「古典探究」教材としての『宇治拾遺物語』を考える

前項で述べた『宇治拾遺物語』と他の作品の比較といった観点から、古典教材を提案する試みはすでに存在し、入門的題材で多く取り上げられる「絵仏師良秀、家の焼くるを見て悦ぶ事」は、芥川龍之介『地獄変』との比較、「検非違使忠明の事」は『今昔物語集』巻19-40「検非違使忠明、清水に於て敵に値ひて命を存する語」^{xii}との比較が一般的である。また、同話・類話比較教材の可能性として、『宇治拾遺物語』巻14-9「貫之歌の事」と、『今昔物語集』巻24-43「土佐守紀貫之子死にて和歌を読む語」とを新たな教材として比較し、説話の語り手の性格の違いから、両説話の性格の違いを検討する提案^{xiii}もある。

筆者は、中学・高校の国語科教員として古典指導にあたるとともに、社会人教育の一環として『宇治拾遺物語』を扱ってきた。社会人対象の講座として『宇治拾遺物語』を読解する場合、いわゆる文法や語法について解説することは少なく、説話そのものの持つ面白さや、類話との比較から、現在に通じる考え方や感じ方を深め、言葉の変遷を知ることによって重点が置かれる。その読解は、これからはじまる「古典探究」教材としての『宇治拾遺物語』に通じる部分があると考えられる。学習指導要領「古典探究」の〔思考力、判断力、表現力等〕のA読むこと に掲げられている

- (1) オ 古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること

- カ 古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること
- (2) ア 古典の作品や文章を読み、その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて、調べて発表したり議論したりする活動
- ウ 古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動

と共通する部分が多く、さらには、「古典探究」の目標である「(3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」ことをすでに実践し、「主体的・対話的で深い学び」を実現しているからである。高校生への指導内容として、文法知識・文学史的事項など指導すべき点はあるが、「主体的・対話的で深い学び」のために、どのような読解が可能であるか、実践例を報告する。

2 - (2) 「絵仏師良秀、家の焼くるを見て悦ぶ事」

「国語総合」の入門教材として扱われる巻3-6「絵仏師良秀、家の焼くるを見て悦ぶ事」(以下、「絵仏師良秀」)を深く読むために、その前話である巻3-5「鳥羽僧正、国俊と戯れの事」と合わせて読む実践例をあげる。

「絵仏師良秀」は、自宅が火事となった時、家の中に客から頼まれている仏画だけでなく、妻子まで置き去りにして逃げ出した良秀が、燃える自宅を見ながら「これで仏画の火炎をうまく書ける。もうけものをした」と喜ぶ話である。良秀の様子を見に来た人々が「物の憑き給へるか(物の怪が憑りつきなされたか)」と心配しても、かえって「この道を立てて世にあらんには、仏だによく書き奉らば、百千の家も出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ(仏画の道を立てて世を送るには、仏さえ立派に描けるなら、家なんかいくらでも建てられよう。あんたたちこそ、さしたる才能もお持ち合わせにならないから、物を惜しみなさるのだ)」とバカにするのであるが、『宇治拾遺物語』は、「その後には、良秀がよぢり不動とて今に人々愛で合へり。(その後の作であろう、良秀のよぢり不動とって、いまだに人々がたたえ合っている)」と結ぶ。良秀の人間性を疑う行動に対しての批判ではなく、その後に生まれた作品についての称賛で終わるため、読後、一種異様な感じを受ける。学習した高校生たちも社会人も、「良秀はひどい」「妻や子がかわいそう」「人の命より自分が儲ける方が大事なのか」といった感想を持つ(もちろん、「良秀はかっこいい」と我が道を貫く生き方を肯定する場合もある)。この話を、芥川『地獄変』と比較して、「芸術家の魂」として解釈することも可能だが、「絵仏師良秀」は芸術家たる絵仏師を称える話として読んでよいのか、読後に感じる「ひどい」という素直な思いは間違った解釈なのか。良秀の行動と業績について、どのような解釈ができるかを考える上で、「鳥羽僧正、国俊と戯れの事」を参照してみよう。

鳥羽僧正覚猷(1053-1140)は、源隆国の子で、三井寺の長吏をつとめ、第47代延暦

寺座主にもなった当時の有名な僧侶である。父の源隆国は醍醐天皇の子孫で、藤原頼通を補佐した権大納言であると同時に、『宇治拾遺物語』「序」に登場し、『宇治拾遺物語』成立のきっかけとなった人物である。血筋から見ても、仏教者としても、当時一流の人物であった鳥羽僧正が、甥（本来は兄だが、『宇治拾遺物語』の記述に従う）の国俊に待ちぼうけを食らわせ、その上、勝手に国俊の牛車を借りて外出してしまうというところから、話が展開していく。あまりに勝手な行動に怒った国俊は、鳥羽僧正に報復することにした。それは、日ごろ、鳥羽僧正は、

湯舟に藁をこまごまと切りて一はた入れて、それが上に筵を敷きて^{xiv}、歩きまはりては、左右なく湯殿へ行きて裸になりて、「えさい、かさい、とりふすま^{xv}」といひて、湯舟にさくとのけざまに臥す事をぞし給ひける。

（浴槽に藁を細かく切っていっぱい入れて、その上にむしろを敷いて、外出から帰って来るや、まっすぐに湯殿に行き、裸になって「えさい、かさい、とりふすま」と言って、浴槽にさっとあおむけに寝るという入り方をなさっていた）

という行動をすることを知っていた国俊は、浴槽に入っている藁を全て取りのけ、かわりに囲碁盤を裏返して置いて、筵で覆っておいた。そんなこととは知らない鳥羽僧正は、帰って来るやいなや、国俊を待たせたこと、勝手に牛車を使ったことなどを謝りもせず（国俊の存在そのものを忘れてるように読める）、浴槽へ飛び込んだ。しかし、そこはいつもの浴槽ではない。

碁盤の足のいかり差し上がりたるに尻骨を荒う突きて、年高うなりたる人の、死に入りて、さし反りて臥したりけるが、その後音なかりければ、近う使ふ僧寄りて見れば、目を上に見つけて死に入りて寝たり。

（碁盤の足の高く突き出た所に、尻の骨をこっぴどく打ちつけてしまい、何しろ年若いもので、死んだようになってそり返って倒れていたが、湯殿に入ってから声がなかったので、身近に召し使われていた僧が駆けつけて見ると、目をつり上げて気絶している）

鳥羽僧正はその後、息を吹き返すのであるが、この話の結語は「この戯れ、いとはしたなかりけるにや（このいたずらは、ずいぶん度を超していたのではなかろうか）」である。鳥羽僧正が黙って国俊の牛車を借りて何時間も戻ってこないのもたちが悪いが、その報復として国俊が行ったことは「はしたなかりける（度を超していた）」と『宇治拾遺物語』は考えるのである。先に述べたように、鳥羽僧正は当時一流の人物であり、その甥（または兄）である国俊も血筋・地位ともに貴族階級である。公的には「立派な人」でありながら、「はしたなかりける」行動をとるギャップは、「絵仏師良秀」において、「今に人々愛で愛へ」る作品を作った良秀の世間的な評判とその行動とのギャップと重ねて見ることができよう。実際、現在でも世間的に立派な人物が、プライベートの人物像と落差があることがあり、石川啄木の抒情的な短歌作品と彼の人間性^{xvi}とのギャップや、野口英世の業績と周りの人々にかけた多くの迷惑^{xvii}など、偉人が必ずしも人間性に優れているとは限らな

いこと、一方で、人間性が劣っていても、その業績や作品に影響するものではないことなど、社会人対象の講座では話題が尽きなかった。高校生でも、今までの体験から人間性と結果が結びつかないことは理解できるであろうし、それが人間の複雑さへの理解を深めることになるだろう。「絵仏師良秀」では言及されていないものの、良秀の行動が「はしたなかりける」行動であったことは、読者には自然に了解され、その上での、業績への称賛であると解釈できる。また、「鳥羽僧正、国俊と戯れの事」そのものが、前述した杉山の9条件を満たしており、この話そのものが「古典探究」の教材たりうると同時に、「絵仏師良秀」への理解を深めることが可能なのである。

なお、『宇治拾遺物語』の前後話を関連させて解釈することの妥当性については、『宇治拾遺物語』の説話配列について説明する必要があるだろう。『宇治拾遺物語』の説話配列は、古くは「雑纂」であると考えられてきたが、増田勝実や三木紀人が、話と話とが「連想の糸」によって次々に連続展開していく「巡り物語」的配列法である可能性を示した^{xiii}。現在は、小峯和明が主張するように、「一話一話がはたして緊密な連携をもっているといえるかどうか極めて疑わしい^{xiv}」という考えが主流であるが、その小峯も「連想は飛び越えてつらなりあう。(中略)連想に濃淡があるほうが自然ではないか」と述べ、連想がつながっていることそのものについては否定していない。小林保治が「連想契機をかたくなに隣接する二話間に限定して見ようとするのは確かに問題だが、その事実(『宇治拾遺物語』の説話が何らかの連絡要素によって繋がっていると考えること—引用者注)は、説話集をダイナミックに読むことを手助けする^{xv}」と述べるように、前後関係にある説話から、新たな読みを探ることは「絵仏師良秀」の末尾部分の解釈に考える余地を与え、議論の題材となるはずである。

2 - (3) 「木こり小童隠題歌の事」

巻12-11「木こり小童隠題歌の事」についても教材としての可能性を探りたい。本文を引用する。

今は昔、隠題をいみじく興ぜさせ給ひける御門の、筆築を詠ませられけるに、人々わろく詠みたりけるに、木こる童の、暁、山へ行くといひける。「この比筆築を詠ませさせ給ふなるを、人のえ詠み給はざる、童こそ詠みたれ」といひければ、具して行く童部、「あな、おほけな。かかる事ないひそ。さまにも似ず。いまいまし」といひければ、「などか必ずさまに似る事か」とて、

めぐりくる春々ごとに桜花いくたびちりき人に間はばや^{xvi}

といひたりける。さまにも似ず、思ひかけずぞ。

(今は昔、物の名を歌の中に隠して詠むことを、たいへんおもしろがられておいでになった帝が、「筆築」というのを詠ませられたのに、誰もうまく詠めなかった折のこと、子供の木こりが明け方山へ行くといつてこんなことを言った。「このごろ筆築をお詠ませになるということだが、誰一人上手にお詠みになれないそうな。この自

分はうまく詠んだのだが」と。すると一緒に連れだって行く子供が、「ああ身の程知らずな、そんなことを言うな。柄にもない。思い上がりだ」と言うと、「どうして柄によると決まっているものか」と言って、

毎年めぐって来る春ごとに桜の花は幾度咲き、また散っていったことか、誰かに聞いてみたいものだ

と詠んだので、柄にも似合わず思いがけないことであった。)

和歌の「隠題」という言語遊戯について扱った話である。掛詞・枕詞といった修辞技法を学ぶ機会はあるが、遊びとしての和歌である「隠題」について学ぶ機会は少ない。しかし、特定の言葉を入れて詠むことは、テーマを決めて詠むことと大きな差はなく、また、その意外性を楽しむ言語遊戯である。「隠題」和歌は、『古今和歌集』巻10「物名」に46首所収され、十二支を詠みこんだ和歌^{xxii}や、旧国名を詠みこんだ狂歌^{xxiii}など、江戸時代まで楽しまれていた文化であった。このような紹介をすると、「自分の名前を詠みこんでみよう」「『宇治拾遺』を詠みこんでみよう」といった創作活動につながる。社会人講座では「宇治」「拾遺」を詠みこんで、「酔芙蓉 十時頃は赤くなり 周囲はみんなほろ酔い加減」という大人ならではの傑作も生まれた。生徒それぞれが創作に取り組み、またそれを皆で鑑賞することは、「古典探究」の言語表現活動として活用できると考える。

まとめにかえて

本稿では、2022年度からはじまる高等学校「古典探究」教材としての『宇治拾遺物語』の可能性について考察した。従来、「国語総合」、「古典A」、「古典B」の入門的教材として扱われ、単に「意外な展開の面白さ」から古文に興味を持たせる役割、また「修辞法や比喻法など深みのある表現技巧が少ない」簡単な古文であることから、これから古文読むための言語技術習得としての役割を果たす教材に終始してきた感が強い。しかし、「主体的・対話的で深い学び」の授業を行う上で、「意外な展開の面白さ」と比較的簡単な古文であることが、利点となり、他の関連説話との比較を考察したり、現在の考え方・感じ方との差異を発見したりすることが短い時間でも可能になる。人物関係が複雑で難易度の高い古文は、従来と同じ読解だけで終わってしまう懸念がある。もちろん、難易度の高い古文を読みこなすことも大切であるが、皆で論じあい、鑑賞しあいながら学ぶためには、説話、なかでも『宇治拾遺物語』を幅広く教材として扱い、研究開発する必要があると考える。

注

- i 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」
- ii 注iには「必要に応じて、翻訳の文章、古典における文学的な文章、近代以降の文語文、演劇や英語の作品及び文学などについての評論文などを用いることができること」とある。
- iii 杉山英昭「古文入門期指導の周辺—『国語総合・古典編』説話文学教材をめぐって—」（國學院大學教育研究室紀要 2006.2）
- iv 小峯和明・藤沢周平「新潮古典アルバム9 今昔物語集・宇治拾遺物語」（新潮社 1991.1）

- v 本文・タイトル表記および現代語訳は、小林保治・増古和子「新編 日本古典文学全集 宇治拾遺物語」(小学館 1996.7) に従う
- vi 須藤敬「『兄のそら寝』考—古文導入教材としての適合性を考える」(『藝文研究』95 P98-P114 2008.12)
- vii 辻陽史・大島薫「『宇治拾遺物語』「兄ノカイ餅スルに空寝シタル事」考—高等学校で学ぶ「古文」の教材を読む—」(『國文學』97号 P51-P66 2013.3)
- viii 竹村真治「言述論—for 説話集論」(笠間書院 2003)
- ix 注 i に同じ
- x 注 i 「古典探究」〔思考力・判断力・表現力等〕A 読むこと
- xi 2020年度受験用「全国大学入試問題正解7～9 国語」(旺文社 2019年)
- xii 本文およびタイトルは、馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一「新編 日本古典文学全集 今昔物語集 (1)～(4)」(小学館)の表記に従う
- xiii 大鋸洋樹「新たな古典入門教材の可能性—『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』から考える—」(『古典教育デザイン』3巻 P19-P28 2017.12)
- xiv 注 v の頭注に「僧正の疲労回復の治療法。これについて新大系が紹介している『明月記』元久元年十一月二十九日条の九条兼実からの伝聞記事(中略)「又骨を病む事ハ、湯槽に馬の食スル物ヲ入れて、温湯ヲ入れて、上に蓆を敷きてムス。第一タスカル事なり」として、その当時の治療法であったことを指摘している。
- xv 注 v 頭注「呪文、『えっさ、こらさ』に通じる掛声、『一切合財』という意味の掛声など諸説ある」
- xvi 三浦光子(啄木の実妹)『兄啄木の思い出』(理論社1964)、ドナルド・キーン著、角地幸男訳『石川啄木』(新潮社2016)などに詳しい
- xvii 飯沼信子『野口英世の妻』(新人物往来社 1992)、北篤『正伝 野口英世』(毎日新聞社2003)
- xviii 益田勝実「中世的風刺家のおもかげ—『宇治拾遺物語』の作者—」(『文學』34巻12号1966.12 岩波書店)、三木紀人「背後の貴種たち—宇治拾遺物語第一〇話とその前後—」(『成蹊国文』巻7 1974.2)
- xix 小峯和明「宇治拾遺物語—<もどき>の文芸」(『国文学研究資料館紀要』16号 1990.3)
- xx 注 v 掲載文献 解説三「説話配列の特色」
- xxi 注 v 頭注に「第四句の中に「ひちりき」を巧みに詠みこんでいる」(『藤六集』に「ひちりき／めぐりくるはるはるごとにさく花はいくたびちりきふく風やしる」とあり、これをもとにして、聞き手の意表をつくために、詠み手を隠題の名手から樵夫の、しかも少年に改めて作られた話かもしれない」と解説している。
- xxii 『拾遺和歌集』439・440「一夜寝て憂しとらこそは思ひけめ浮き名立つ身ぞわびしかりける」[生(む)まれより櫃し作れば山に去る一人往ぬるに人率(ゐ)ていませ]
- xxiii 栗柯亭木端編『狂歌続ますかがみ』(元文五年(1740)刊)257「いつとても六つ起きするが日頃にて身の仕舞良き家の年かさ」には、「伊豆・陸奥・隠岐・駿河・肥後・美濃・志摩・伊予・紀伊・能登」の十国が隠されている